
とある最弱の超能力者 《レベル5》

カーキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある最弱の超能力者《レベル5》

【Nコード】

N5042R

【作者名】

カーキ

【あらすじ】

テンプレの様に神に殺され、テンプレの様に転生させられ、テンプレの様に禁書目録の世界を生きるようになった主人公。しかし問題点は山ほどあった。自分が上条当麻の双子の弟であり、学園都市の超能力者（レベル5）で序列は最下位という意味不明なポジションにいたことだった。

第0話 テンプレ通りの転生ですが何か？（前書き）

こんな駄文でも楽しんでもらえれば幸いです。

第0話 テンプレ通りの転生ですが何か？

そう、あれは不幸な事故だった。新約発売、即行フラゲして帰っている真っ最中だった。なんか知らんが二次創作のテンプレ通りにトラックが突っ込んできて即あぼん。

「まだ挿絵と後書きしか読んでなかったのに……」

で、今俺の目の前にはテンプレの如く、すぐ幼女な神様らしき人がいる訳だ。ここから導き出される答えは……。

「うむ。君は見かけによらず頭が回るようだね。そう、君は死んでしまったんだ。主に私のミスが原因で」

ですよねー。しかも心まですっぴり読まれている。ここまですっぴりだと作者やる気ないだろゴバハッ！？

「はいメタ発言禁止なー。分かっているとと思うけどこれからお前にチャンスやる。つまりTHE☆転生だ！」

うん。やっぱりそうなるんだね。でもなんかもう俺としては丁重にお断りしたい。なぜなら転生するとなんか事がないのはお決まりなもの。

「ちなみに断ることはできないぞ。もうあっちの世界での受け入れのための改変はできてるし、お前を転生させないと威厳が保てない」
その程度で保てなくなる威厳ならいっそなくなったほうがいい。
むしろなくなってください。そして面倒です。

「まあ気にすんな。ちなみに転生先は『とある』の世界でお前はメインキャラの身近な存在として転生する。まあ誰の近くに転生するかはそれまでのお楽しみって事だ」

うわあ……。原作介入フラグがびんびんとたってますぜ……。しかも身近なメインキャラが苦手なキャラだったらやだな……。レベル5勢はほとんど好きだけど関わったら暗部落ちだろうし……。

「だから細かいことは気にするな。という訳で逝っといでー」

そんなこんなで、俺は転生した。

第0話 テンプレ通りの転生ですが何か？（後書き）

テンプレすぎな転生ですね。

第1話 超電磁砲とご対面（前書き）

7月16日からスタートです。

第1話 超電磁砲とご対面

あの運命？の転生からもう15、いや、16か？まあいいけど、
そんなぐらいの時間が経った。

とりあえず転生して一番驚いたのは俺の身近なメインキャラとい
うのがね……。

あの上条当麻だったことだな。

俺の名前は上条黄麻。何でも俺はアイツの双子の弟で、しかも見
分ける特徴が右目の下の泣き黒子ぐらいしかないほど瓜二つだ。ま
あ父さんと母さんは一発で見抜いてくるが……。ちなみにフラグ体
質についてはアイツがすべて持っていました。はい。

幼稚園とか小学生ぐらいの時は本当に大変だったな。当麻が不
幸体質だからそれをかばうのに必死だったから。まあ中学生あたり
から扱いが不幸の避雷針へと進化したんだが。

ちなみに俺の能力は劣化複製^{ロストコピー}。強度はなんと超能力者だ^{レベル5}。ただし、
序列は第8位どころか最下位という特殊な区分にいる。

この能力は相手の異能の力を自分の力として使用できるが、その
強さは所詮まがい物だ。超能力者^{レベル5}の力をコピーしても、せいぜい強^レ
能力者^{ベル3}程度の力が出せればいい方だ。あと、この能力は相手のA I
M拡散力場に影響されて発動するから、一定の距離だけ離れると使
用できない。

極めて珍しい力という特性から超能力者^{レベル5}になっているが、この程
度じゃ軍隊どころか武装無能力集団にも倒される。だから、『第8
位』ではなく、『最下位』。全く研究者もこれ以上ないほどの皮肉
な呼び名をつけたな……。

さて、俺は今は何の不自由もなく当麻と同じ学校に通っている。
たとえ双子であっても本来学生寮の部屋は分かれるはずなのだが、
俺は何故か当麻と同じ部屋に住んでいる。

確か小萌先生はあの時『部屋が足りないから双子であるあなた達
だけ同室なのですよ』とかいってなあ……。』

そういや今日はあのスーパーで特売があったな。今なら走れば間に合うか？ そう思って走り出そうとした瞬間に後ろから女の子に声をかけられた。

「見つけたわ！ 今日こそ私と勝負しなさい！」

あー……。もう皆さんなら分かると思うが、俺に声をかけてきたのは常盤台中学の夏服を着た超能力者^{レベル5}の第3位、御坂美琴だ。まあ声をかけてきた理由はあれだ。うん。

「人違いですう。他あたってくださいあい」

「しらばっくれるつもりかしら！ 今まで人のことを散々散々こけに
してきたくせに！」

いや、お前が勘違いしているだけだからな？ 俺は早く特売で家計を少しでも楽にしたいんだからどっか行ってくれよ。

「それは俺の双子の兄です。私には何のかかわりありません」

「ふっざけんなああああ！」

バチバチイ！という音とともに雷撃の槍が飛んできた。ヤバイ！直撃したらマジで死ぬってコレ！

「ぐわあああああ！？」

「えっ……？ちょっと、アンタ大丈夫なの！？」

「心配するぐらいなら……攻撃してくんじゃ……ねえよ……」

助かった……。コピーした能力で多少電撃の威力を軽減できてなかったら俺は二度目の死を迎えることになっていたぜ……。

「なんでいつもみたいに無効化しないのよ？」

「だから俺はアイツじゃないと何度言ったら……」

「え？」

はあ……。こりやもう1回説明の必要ありかな？

「へえ。で、アンタはアイツの双子の弟で、あの攻撃で死ななかったのはアンタの能力のおかげって訳ね」

「そうですね……。まったく、人違いで殺人とか、俺が警備員アンチスキルに通報すればお前を抹殺できるレベルだぞ、社会的に」

全く、常盤台中学はどんな教育をしているんだ。いやでも黒子とか他超電磁砲登場キャラはちゃんとしてるし、やっぱり親か？いや

あの親馬鹿たちがそんな教育するとも思えないし……。

「し、仕方ないじゃないの！第一アンタらがそんなに似ているのが悪いのよ！」

なんですかその超理論！俺だけでなく当麻の方の上条さんにも理解しがたい理屈だと思うのですが！

「はあ……。じゃあこれからは俺か当麻かどうかを判断してからにしてくれよ。俺はアイツと違ってお人よしじゃないから今度やられたらお前通報するから」

「ふん！通報ねえ！それをするまでにアンタがまともに動くことができればの話だけどね……。って聞きなさいよ！アンタら兄弟はスルースキルまで瓜二つか！？」

ダッシュだダッシュ！あんなのとこれ以上いたら命がいくらあっても足りないぜ！よし、そろそろ巻いたか……。

あ、特売行き損ねた……。不幸だー。

第1話 超電磁砲とご対面（後書き）

なんだか御坂のキャラが微妙に違う気がするな

第2話 ついに本編スタート! (前書き)

地震超怖えええええ!

生きているってすばらしい!

第2話 ついに本編スタート!

「不幸だー!」

「はぁ……。だから関わりたくなかったのに……」

夏休み前日の7月19日、俺と当麻は不良たちとの追いかけてここに精を出していた。

まあ、夏休み前日でハイテンションになるのは分かる。

そしてウェイトレスさんがこけて地獄ラザニアをぶちまけるのだって慣れっこだ。

けどなあ、何故あの不良を御坂美琴から助けようという発想にいたる? 別にあれは幻想御手の情報収集をしていただけだし、放置しても問題なかったのに……。

「なあ……。何でお前はそんなに余裕そうなんだよ。何か策でもあるのか?」

「策か。あるっちゃあるけどな」

「なら早く「お前をあの不良の中へ突き飛ばす」って助かるのお前だけかよ!」

いやあだって俺が追われているのって、お前と顔が似すぎているって理由だったから理不尽な扱いなのは俺なんだけど。全くなんでこんなことになってるんだよ。

「おっ……。? 撒いたみたいだぞ」

「アンタはいつも通り善人ぶって人を助けてるみたいね。今日はおう1人も一緒ですか」

不良がこなくなったと思ったら、後ろからこの逃走劇の元凶になった人物の声が聞こえた。

「あのー……、何も不良相手に能力使うことはなかったんじゃない……？ あいつらなんて普通に放って置けばよかったのに」

「うっさいわね。私はあんな無能力者^{レベル0}なんてどうでもいいの。問題は情報収集を妨害したアンタたちなのよ」

「情報……？」

何のことか分かっていない当麻がつぶやく。しかし無能力者^{レベル0}だからって見下していると後で痛い目を見るぞ……。たとえば浜面さんとか駒場さんとか……。

「ねえ？ 超電磁砲^{レールガン}って知ってる？」

「超電磁砲^{レールガン}？」

「あー、確かにニアモーターカーと似たような理論で弾丸を音速ぐらいで飛ばして攻撃する銃器だっけ？」

「大体はそんな感じよ。まあ口で言っても伝わらないだろうし、『実際に見た方が早いわね』」

そういった瞬間、御坂はコインを手ではじき、そこからオレンジ色の光線のようなものが出てきた。これが超電磁砲^{レールガン}か……。実際見

ると凄い威力だ。てか死ぬ！何か妙に落ち着いていたけどこのままここにいたら命がいくつあっても足りない！

「当麻！悪いけど俺は帰らせてもらうぜ！」

「ちよっ……！この裏切り者！」

当麻がそう叫んだ直後に、後ろから心臓に悪いスパーク音が連続して聞こえる。生きて帰ってこいよ……。

「あっちい……」

翌朝、夏休み初日の7月20日に、俺たちの家電は絶滅していた。それが原因で冷房をかけることもできず、部屋は物凄い熱気と湿気に支配されていた。しかもなんだこの匂いは、絶対に冷蔵庫は全滅だな。

「ふ、不幸だー！」

当麻は相変わらず、カップヤキソバをぶちまけたり、キャッシュカードを踏み碎いたり、小萌先生に補習に呼び出されたりという不幸っぷりを疲労にしていた。

俺は当麻の不幸が飛び火して被害にあうことが多いが、幸い俺の飯は無事だった。

「あー、カップヌードルうめえ」

「もしもし黄麻さん？アナタは腹をすかせた双子の兄に食べ物を恵

むといった心を持っていないのですか？」

「ふっ……。ベランダに引っかかっていた銀髪碧眼の少女シスターとかだったら普通に恵んでいるけどな」

「何だよそれ！？はぁ……。仕方ないから布団でも干すか……。って！？」

布団を持ってベランダに出ようとした当麻が固まる。ああ、そういや今日から本編スタートなんだな。

「どうした？ベランダにカラスの糞でもぶちまけてあったか？」

「黄麻……。お前はこの光景を見ても本当に飯を与えてやることができるのか？」

そう、我が家のベランダには1枚の真っ白な布団が、否、

銀髪碧眼の少女シスターが引っかかっていた。そしてそのシスターさんはこんな台詞を言った。

「おなかへった」

第2話 ついに本編スタート！（後書き）

レールガンの説明ってあんな感じでよかったっけ？

第3話 噛み付きって相当痛いんだな（前書き）

書いてみて分かった。自分は地の文と台詞の分配が苦手だ。

第3話 噛み付きって相当痛いんだな

） 当麻Side ）

「おなかへった」

「……」

「おなかへった」

「……」

あの、これはどういう状況でせう？

俺はいつものように起きて、いろいろあって朝食食べ損ねたりしたけど、まあ普通の範囲内の不幸だった。けどこれは例外だ。ベランダにシスターさんが引っかかって飯を要求するなんてありえませんかよね！

「おなかへった、って言っているんだよ？」

「まさかお前、自分のことを行き倒れとか言わないよな？」

「倒れ死に、とも言う」

なんか黄麻が適当に対応してくれているけどどうしよう。これから補習にだって行かなきゃ行けないのに！

「おなかいっぱいご飯を食べさせてくれるとうれしいな」

謎のシスターさんがそういった途端、黄麻が横目でこちらを見てきた。あの目はこう語っている。『お前が何とかしろ』と。上条さんの的には、冗談とはいえさっきあんな事言ってたお前に解決して欲しいです。はい。

「えっと……、こんなものでよろしければ」

そういつて俺は近くに落ちていた腐ったヤキソバパンを差し出した。流石にこの匂いをかげばとっとと退散してくれるだろう。……そういやどっかの地方でお茶漬け出されると早く帰れて意味になるらしいしな。

「ありがとうございます！そしていただきます！」

えっ、ちょっと流石に腐ってるんだから食べちゃダメだろ！ってギャアアアアア！

＼ 黄麻Side 〵

「まずは自己紹介しないかね。私の名前はね、インデックス禁書目録って言うんだよ？」

「いや、それよりも言うべきことがあるだろ……」

「ちなみに魔法名ならdedicatus545だよ」

「いきなり魔法名とか言われても意味がわからないのですが……。それより、何でお前はベランダにいたんだよ」

皆さんならよく分かると思うが、俺は今インデックスに対して事情を聞いているところだ。飯なら当麻に押し付けてある。ちなみに腐った奴は出すなよ、とは言っておいたから、原作みたいなことにはならないだろう。

「食いもん持ってきたぞー」

「お疲れ、ってお前また小麦粉ぶちまけたのかよ！」

ああ、また当麻が不幸で失った分の損失を俺が補わないといけないのか。飯で一旦会話もとまるし……。

「まあご自由にお食べくださいってもう食ってる!？」

「どれもおいしくて手が止まらないんだよ！」

まずい、このままじゃ事情聴取どころじゃない。インデックスさんの早食い大会で今日一日が終わってしまう！

「いや、飯も大いに結構なのですが事情を聞かせて欲しいのです！まずはベランダに引っかけってきた理由からお願いします！」

「ゴックン、うん、本当は屋上から屋上へ飛び移るつもりだったんだけど、撃たれて失敗しちゃったの」

当麻、ナイスフォロー！にしても実際に聞くとメルヘンな発言だよな。

「撃たれた、って怪我してないみたいだけど」

「うん、この服には防御結界の役目があるからね」

「で、どうしてそんな危険な真似したんだ。確かにそんな服があるなら落ちても大丈夫そうだけど」

「仕方なかったんだよ。追われていたからね」

追われてたって……いきなり言われても普通だったら信じられないよな。しかもこんな小さな女の子がですよ？

「で、誰に追われているんだ？」

「うーん、どこの組織かまでは分からないけど、魔術結社と考えるのが一番妥当かも」

「はあ？魔術？そんなもんがある訳ねーだろ」

当麻、そうやって頑なに否定しているとその人が怒りますよ。

「む、何でそんな風に言って認めないのかな！？この世には不思議な現象がいっぱいあるんだけど、どれもこれも魔術じゃないと説明が付かないものばかりなんだよ！」

「あの子、この街は超能力の開発を行っているから、別に不思議な現象なんて珍しくともなんともないし、自然に起きた現象だって科学で説明で来ちゃうものなんですよ！」

「超能力って言う法則があるなら別の法則として魔術があってもおかしくないんだよ！」

「だったら何でもいいから使ってみてくれよ。そうすれば多少は信じられるし」

「私には魔力がないから使えないんだよ」

あー、なんだか盛り上がってまいりましたねー。何気に俺が空気と化しているし……泣いていいですか？

「はあ、俺にだってちょっとぼっか変わった力があるけどさ、流石に魔術とか言われても信じられねーよ」

「変わった力？」

「そう、イマジンプレイカー幻想殺しって言ってな、それが異能の力なら、俺が右手で触れれば、レールガン超電磁砲だろうがなんだろうが、多分神の奇跡だって打ち消せるんだぜ」

「神様を全く信じてなさそうな人にそんな事言われても信じられないんだよ」

インデックスさん、ごもつともです。あと当麻さん、神の奇跡だって消せるとかは一回試してから言いましょうね。

「魔術はあるけど人前だと使えませんとか言うインチキ魔法少女にだけは言われたくない台詞だな、おい」

「イ、インチキじゃないもん！いいもん、見せてあげる！この修道服は歩く教会って言う防御結界なんだよ！」

「いや、名前だけ言われても意味がわからねーし」

歩く教会。刺繍や縫い方に魔術的意味を持たせ、教会の必要最低限の機能を抽出した服だったような……。たしか布地はトリノ聖骸布をコピーしたから法王級の防御力っていう代物だよな。つか16年ぐらい経ってたのによく覚えていたよ。

いや、そんな事よりヤバイ！早くしないとその骨董品クラスの服もバラバラになっちまう！

「じゃあ包丁でも何でもいいから私を刺してみればいいんだよ！この結界の防御力なら傷ひとつ付かないんだから！」

「へー、じゃあ俺がお前の服に触れば木っ端微塵って訳なんだな？」

「ふふーん。君の力が本当な・ら・ね？」

「上等d「あー！ストップストロップ！」って、いきなり叫ぶなよ！」

「いや、とにかくあの服に触るのだけは止めた方がいい、絶対だ！」

「何だよ。別に問題なんてちっともねーだろ」

「い、いやー、それは……」

俺としては事情を全部話してコイツらを止めたい。だが俺には本人の目の前でオンナノコガハダカニナルカモシテナイという事は口が裂けても言えなかった。

「今更怖気づいても遅いんだよっ！」

ふと眼を逸らした瞬間にインデックスが当麻の右手を引っ張り、自分の肩においていた。終わった……。なんていうかもう社会から抹消されるレベルだ……。

「ふふーん。何が幻想殺しなんだよ。別に何もおきないんだけど？」
イマジンプレイカー

そういった途端、修道服はストンと音を立てて落ちた。とりあえず俺は必死にインデックスから距離をとり、決して視界に入らないように努力した。しかし、シスターさんの牙から逃れることはできず、俺と当麻の悲鳴がこの部屋全体に響き渡った。

「痛え……。あちこち噛み付きやがって……」

「俺は止めようとしたただけだし即視線を逸らしたのにな……」

痛い、これは予想以上に痛い。1箇所ならまだしも色んなところに噛み付いてくるから逃げようがない。あー、原作だと当麻はこれからも噛み付かれていくんだよな。いや、今はそれよりもこの沈黙の方がつらい。

「あの……姫。ここにワイシャツとズボンのセットがあるですがってヒィッ！」

当麻がそういった瞬間に時計やら枕やらが飛んできた。つうか避けるなよ！避けたのが俺に当たってつらいんだよ！

「あれだけの事があったっていうのに、どうして普通に話しかけら

れるんだよ!」

「いや、俺たちも大変ドギマギしているかなんというか!」

「馬鹿にしてえええ!」

「いや、分かったから、そのレンタルビデオを噛み千切ろうとするのだけはおやめください!」

当麻はそういった瞬間に土下座を始めた。当麻の表情を見る限り、普段通りの表情を取り繕うとしていたみただけど、隠しきれていない。まあ俺も初めて見たオンナノコノハダカに相当動揺しているが。

「できた」

そういつてインデックスが広げたのは皆さんお馴染みの修道服安全ピンだらけの布である。

「えっと、それを着るんだよね?」

「……………(汗)」

「そのアイアンメイデンを?」

「……………(沈)」

「日本語では針のむしろと言う」

「……………(涙)」

俺とインデックスのジト眼に耐えられなくなったのか、当麻は土下座を再開した。というより、土下座するぐらいならそんな事いつてやるなよ。

「そーいや、お前はこれからどうするんだよ。当麻は補習があるけど、俺は暇だからしばらくは匿ってやるぜ？」

「やべっ！そうだった！」

「いい。出てくよ。流石に君たちに迷惑をかける訳にはいかないし」

そういつてインデックスは落ち込んだまま部屋から出て行こうとした。フードを忘れていることにも気づいてないみたいだ。俺たちはそんなインデックスを止めようと二人して追いかけてようとしたが、

「痛ってええええぐぼっ！」

えー、何があったかといえますと、当麻が足の小指をドアにぶつけ、あまりの激痛にぶっ倒れると同時に携帯電話を落として、そんな当麻を俺が携帯ごと踏み潰してしまったと言う状況です。
はい。

「うう……。不幸だ」

「不幸というよりドジなだけかも、でもイマジンプレイカー幻想殺しの話が本当なら仕方がないんだよ」

少しだけインデックスは笑っていた。

「どういふことでせう？」

「君の右手は、異能の力なら何でも打ち消すんだよね？ だったら、幸運とか神の加護とかをまとめて打ち消しちゃってと思うよ」

「つまり、お前は右手がある限り自分から幸せをバンバン消してるから幸せになれないって事だ」

「不幸だ……」

当麻の落ち込みっぷりはさっきのインデックス以上だった。

「何が不幸って、そんな力を持って生まれてきちゃったことがもう不幸だよ」

「いや、お前ここ出て行っていく当てでもあるのかよ？」

「ここにいと敵が来るし……。この歩く教会のせいでここにいたって事は相手にも伝わっているだろうしね」

「じゃあ、何でそんな発信機みたいな服着てるんだよ？」

「居場所が分かってても絶対の防御力で耐えられたんだろ、まあお前のせいで壊れちゃったけどな。」

「……申し訳ございません」

「一応、教会まで行けば匿ってもらえるし、今までだって逃げ切れただから大丈夫だよ」

「だとしても放って置く事なんてできねーよ！」

「ああ、当麻もこういつているんだし、多少は協力を求めてもいいんじゃないの？」

「じゃあ、私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」

インデックスは優しくいつていたが、その表情を見れば、暗にこう言っている事が分かる。

こっちにくんな。

「それじゃあね」

そういつてインデックスは去っていつてしまった。あつという間で、どっちの方向にいつたのかもわからない。それでも、俺がどういう行動を取るべきかなんて決まっているけどな！

「悪い、当麻は補習に行ってくれ、俺はアイツを追いかけてくる」

「えっ！ちょっと待てよ！」

後ろで叫ぶ当麻を尻目に、俺はインデックスを追いかけていつた。

第3話 噛み付きって相当痛いんだな（後書き）

インデックスの「だよ」「かも」の使い分けが思ったより難しいです。

鎌池先生の考える口調は独特だという事を再認識しました。

次回は主人公の過去話でもしようと思っています。

第4話 御坂美琴とのエンカウント率は異常（前書き）

大分更新遅れましたねー
もっと早く書ければ……

第4話 御坂美琴とのエンカウント率は異常

） 黄麻Side ）

「あっちいいいい……」

俺は今、インデックスを探すために学園都市中を走り回っている。もう搜索開始からかれこれ2時間は経過していた。油断した……。女の子だから足も速くないだろうし、その辺探せばすぐに見つかるだろうとたかをくくっていたのが間違いだった。

「よく考えれば1年も逃亡生活してきたんだからあたりまえだよな
ー」

協力してもらえるなら^{アンチスキル}警備員か^{ジャッジメント}風紀委員に手伝ってもらいたいけど、魔術がらみのことに巻き込むと後で面倒な事になりそうだからな……。なんか、転生前はアレだけこんな危険なことしたくない、って言っていた俺がこんな風に行動しているのも不思議だな。やっぱりアイツの影響受けすぎたか……。

） 6年前 ）

小学校5年の時、俺のクラスではいじめが深刻な問題だった。別に俺がいじめられていた訳でもないし、いじめられていた子は俺とあまり縁のない子だった。

いじめの理由は多分あの子がいじめっ子の機嫌を損ねるような事でも言ったのだろう。教師達はいじめがある事実を認めず、それ以

外の人は全く助けようとしなない。

そんな状況で、俺はどうかしようと思っていた。当時の俺は喧嘩だったら当麻以外の小学生には勝てる自信はあった。助けに入る事で、俺がいじめられる事になっても撃退できると。

しかし、それが原因でいじめがエスカレートしたら？腹いせに他の人がいじめられたらどうする？そういった考えで俺は何もする事ができなかった。そんな時に、

「お前らはこんな事して楽しいのかよ！」

当麻はいじめっ子に怒鳴りつけていた。

「こんな事って……、どんな事だよ」

「決まってるだろ！お前らがアイツをいじめていることだろうが！」

「何でお前にそんな事言われなきゃならないんだよ……。あつ、もしかしてお前アレが好きとか言うの？」

「俺はアイツと話した事もないし、仮に好きだとしてもそんな小さい事はどうでもいいんだよ。俺はお前達の行動が許せないだけだ！」

「へえ……。じゃあ辞めなかったらどうするつもりなんだよ。」

「力ずくでも止めさせてやる！」

そういった瞬間、当麻はいじめっ子達に殴りかかっていった。当麻が喧嘩でいじめっ子達を肃清した後、当麻は先生に呼ばれてしまった。いじめっ子達はいした怪我はしなかったが、それでも暴力

を振るった事に変わりない。だがいじめを止めたという事もあつたか、大した説教ではなかったそうだ。

それから数日後、何であんなすぐにいじめっ子に向かっていったのか聞いてみた。自分が行動を起こして悪化するかもしれないのに。

「困ってる人がいたら助けるのは当たり前だろ。」

もっとも当麻らしい返答だった。だけど俺はそれだけでは納得がなかった。

「でも、そう思えるのはごく一部の人間だけだよ。俺にはとてもできないな」

「何言ってるんだよ。お前だってそういう事ができるハズだぜ。」

「そう言えるのはお前がそういう行動をしてきたからだよ。双子の弟だからって俺ができる訳じゃない」

「でも、お前は俺が幼稚園で疫病神と呼ばれていた時に、止めに入ってきたじゃないか。お前ももっとリスクとかを考えずに行動すれば誰かを助けられる人間だぜ」

俺は当麻のその一言で変わった。自分の事よりも、他人の事を考えれば、誰かを救えると。また、それは同時に自分の為にもなっていると思えるようになった。

） 回想終了 ）

大分懐かしい事を思い出したな……。アレがあったから俺は当麻みたいに積極的に人を助けるようになった。だから、これから本編と関わって危険な目にあうとしても全員助ける覚悟で戦っていきたい……。

「あーもう！何なのあの馬鹿は！何が『真面目にやってもいいんかよ』よ！」

おう……。人がせっかく思い出にふけていたというのに。ちなみに目の前の人物が誰であるかは説明不要であろう。常盤台の制服に短パン、自販機に蹴りの全てを満たす人物なんて御坂美琴ただ1人だろう。

「とりあえずここから離れよう……。今のあいつに関わったら絶対に死ぬ死んでしまう死ぬだろう」

「へー。あの馬鹿だけじゃなくてアンタもそんな発言するのね。」

ゾワッ！と言う使い古された表現がしっくりくる悪寒が走った。ああ……。神よ、何故私を見捨てたのですか。というより俺はコイツとのエンカウント率高すぎだろ！

「何のことでしょうか？常盤台のお嬢様」

「何のことじゃないわよ！アイツと違ってアンタはまだ人をおちよくらないと思っていたけど、ここまで言われたら黙っていられないわ！」

「いや、うちの駄目当麻が何をしたかは知りませんが、それは上条

弟である黄麻さんには全く関係がありませんとのことよ!」

「うっさいわね!」

ズドン!と雷撃の槍が俺に向かって飛んできた。それを能力によって軌道を変え、回避行動をとることで何とか避けた。

「ああもう!俺はアイツと違って完全に消す事なんてできないんだから攻撃なんてすんじゃねえ!」

「知らないわよ!アンタらが人の神経を逆撫でするのが「お姉様ー!こんな所にいたんですのねー!」ってこの殿方はどちら様ですの! ?もしかしてお姉様、こんな類人猿のなり損ないのような方と……」

「あー……、誤解してるみたいだから一応言っておくけどな、俺は被害者でコイツは殺人未遂犯、それ以外に関係性なんでないぞ」

「ちょっと、殺人未遂犯ってどういう事かしら」

実際事実じゃねえか……。せめて能力を使わなくなってからそのような事を言いましょうね。

「そうでしたか、お姉様ジャッジメントがご迷惑をおかけした様で申し訳ありませんでしたの。私、風紀委員を勤めている白井黒子と申しますの」

「俺は上条黄麻だ。ジャッジメント風紀委員なら1つ聞いておきたいんだけど、銀髪碧眼で、修道服を着たこの位の背の女の子を見なかったか?」

「このぐらいの背丈って言うとは……、私達と同じか年下って事よね。まさかアンタがロリコンだったとは……」

「な訳ねーだろーが！ちょっとアイツに忘れ物届けなきやいけないだけだ」

まあ傍からみたらそう思われても仕方ないかもしれないけど……、なんか釈然としない。

「そんな子は見かけておりませんけど……。一応風紀委員の方に協力を要請しましょうか？」

「あー、じゃあもうちょっと探していなかったらそうさせて貰うよ。じゃあな、白井、ビリビリ」

「誰がビリビリですって！」

「貴方も気をつけてくださいね。もう完全下校時刻も過ぎている事ですし……」

はあー、暗くなってくると探しにくくなってるって言うのに……。って『完全下校時刻を過ぎている』？

「ッ！まずい！」

「どうしましたの？」

「い、いや、何でもない」

御坂が今日の出来事で当麻に起こっているって事は、当麻は今帰っている途中か、学生寮にいる頃だ。急いで戻らねえとインデックスが……！

第4話 御坂美琴とのエンカウント率は異常（後書き）

ようやくバトルに入ることができそうだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5042r/>

とある最弱の超能力者《レベル5》

2011年4月5日16時33分発行